

ベツレヘム

ルカによる福音書 2:1~20

2018. 12. 23 熊取教会

5 ¹ そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。² これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。³ 人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。⁴ ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。⁵ 身ごもっていた、いいなずけの MARIA と一緒に登録するためである。⁶ ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、⁷ 初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

10 ⁸ その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。⁹ すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。¹⁰ 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。¹¹ 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。¹² あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」¹³ すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。¹⁴ 「いと高きところには栄光、神にあれ、/ 地には平和、御心に適う人にあれ。」¹⁵ 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。¹⁶ そして急いで行って、MARIA とヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。¹⁷ その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。¹⁸ 聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。¹⁹ しかし、MARIA はこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。²⁰ 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりにだったので、

20 神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

【神からの贈り物】

今日はクリスマス礼拝です。25 日がクリスマスであります。私たちの教会は今日をクリスマス礼拝として守ります。クリスマスは何の日か、だれもがよく知っています。それは、この世界

25 をお造り下さった神様が、私達すべての人に、思いもかけない素晴らしい贈物をして下さったということ。そのことを感謝し、お祝いをする日です。その贈物とは、6 節にこうあります。2:6 ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、^{2:7} 初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。 飼葉桶の中に寝かせられた「男の子」これが神様からの贈物です。それは、ローマ皇帝がアウグストゥス、シリア州の総督がキリニウスの時代であり、

30 全住民に住民登録するように勅令が出た年でした。それはいつであるか、学者たちがいろいろと歴史書を比べて、どうも、紀元前 4 年であろう、と、皆の意見がだいたい一致しているようです。西暦紀元、を決めた学者は、本当は、イエス様のお生まれになった年を元年として暦を作りたかったようですが、計算違いがあった。時代は紀元前 4 年。

【ベツレヘム】

場所は、ベツレヘム。エルサレムの南、10km ほどのところにある町です。「ベツ」は家。レヘムは「パン」。パン作りで知られていたものでありましょうか。古くはエフラタと呼ばれた。とあります。エフラタは、訳せば「灰の小山」であり、実り豊かな土地を言う、

とあります。この、ベツレヘムは、聖書の中に何度も出て来ます。最初に出てくるのは、創世記35章。アブラハムの孫、ヤコブが、叔父のところからカナン地方に帰る旅でここを通りかかる。4人の妻と、子供たち11人をつれて帰ってくる旅の途中です。ふるさとまであと60km。そのとき、身ごもっていた最愛の妻ラケルが産気づき、末っ子のベニヤミンを生む、しかし、難産で、ラケルは命を失います。ヤコブは、ラケルを、ベツレヘムの近くに葬り、そのまま故郷への旅を続ける。彼はベツレヘムを思い起こす度に、深い悲しみに打たれました。

次がよく知られたルツ記。異国の女性であったルツが、夫亡き後も、姑ナオミに従って、ナオミの故郷ベツレヘムへと帰ってきた。そこで、遠い親戚のボアズと結婚し、ナオミのために子を設けました。その子の孫がエッサイ。エッサイよりダビデが生まれました。ベツレヘムがダビデの故郷です。

マタイ福音書の冒頭に、イエス様の家系図が出ています。アブラハムからダビデまで14代。ダビデから、バビロン捕囚まで14代、そしてバビロン捕囚からイエス様まで14代。とあります。イエス様の父ヨセフは、ダビデの家系であり、人口調査のためにナザレから出身地ベツレヘムまで旅をしてきて、そこで、マリアが男の子を生んだ。旅の中で子を産んだ点で、ラケルと同じです。

ベツレヘム。そこにはラケルの悲しみ、ルツの祝福、そしてマリアに託された苦しみの刻印された土地です。子を産む母の物語が凝縮されている町、ベツレヘム。

イエス様の誕生日が12月25日かどうか、については、わからないと、大半の学者が応えます。しかし、イエス様の生まれた時代と生まれた町について、疑念を挟む者はありません。つまり、イエス様は、時と所を備えた、歴史上の誕生日をもっておられる。それが実際にはいつか、わからないだけです。生身の体を備えた、私たちと同じ、肉体をもっておられた方だということ、歴史上の人物です。

【幼子誕生の意味】

しかしその「一人の男の子が生まれた」ということが、どうして神様からの最上の贈物なのか。「どうして世界中の人がこんなにお祝いをするのか」。それについては、10節にあります。御使が、その晩野宿をしていた羊飼達に語った言葉。

¹⁰ 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。

¹¹ 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。¹² あなたがたは、布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

「救い主がお生まれになった。『このかたこそメシア』」これがその男の子です。ほかの子供とそんなに違ったことは無いけれども、神様が私達の救主として、与えて下さった「メシアだ」そう天使が語っています。ルカが、天使に語らせている、といってもよいでありましょう。

【物理学者たちの仮説】

『サイエンス』という、一応信頼できる、150年以上の歴史のある科学雑誌を、毎月購読していますが、それに面白い、驚くようなことが書いてありました。電子線とか、光、とかを使って、

5 細い隙間を通り抜けさせる実験があります。「スリット実験」。それで確認されたことは、光や
電子線、など、大変小さなものに起きる現象について、時間は一方向だけにながれているのでは
ない、ということが確認された。というのであります。つまり、私たちは時間順に、原因があつ
て、そして結果があると考えている。原因より先に結果があることはあり得ない。しかし、細か
10 5 な世界では、結果を知って、原因のほうが、変わる、ということがあらしい。何が言いたいか
と申しますと、私たちは「過去は変わらない」と考えている。しかし、物理的な微小な世界では、
今の結果に合うように、過去の原因の方が変わる。そういう現象があると、まだ仮説の段階です
が、物理学者たちが考え始めている。そういう実験結果が得られている、というのです。ふつう
の大きさの世界での出来事ではなく、ごくごく小さな世界での事でありまして、日常生活で起
10 きることではありません。しかし、結果からさかのぼって、過去が変わる。そんなことが起こり
うる。と専門家が言っている。

【過去の意味は変わる】

15 私たちにはっきり言えることは、たとえ過去は変わらなくても、過去の意味は変わります。な
にが言いたいのか、と申しますと、ルカは、結果を先に知っている。イエス様と出会って、ルカ
の生き方は変わった。彼の毎日はずっとイエス様と一緒にあって喜びと愛に満ちたものとなった。
その結果を抱えて、心に喜びと感謝を持ちながら、イエス様のお生まれになったときの意味を、
書き記した、ということが言いたいのです。このかたは確かに、救い主であった。野原で徹夜を
20 しなければならぬ、苦しみの多い目立たない人々と共に生きて下さった方だ。イエス様が来て
くださったことを一番喜ぶのはだれか。それは羊飼いのような、人々から爪はじきされたような
人々ではないか。神の知らせは、そのような人々に真っ先に告げられる。ルカが文学的手法を用
い、ルカの心の中に住んでおられるイエス様と一緒に、愛を込めて書き記した物語。それが、ベ
ツレヘムの物語でありましょう。ルカには、マリアから直接出来事を聞く機会もあつたらうと
25 思います。ですから、この物語は全くの創作であるとは言えません。マリアが経験した出来事を、
マリアも、十字架と復活のイエス様を経験して、その経験からさかのぼって、イエス様のお生ま
れになった物語に意味を与えたに違いありません。ルカ福音書に顕された、まことに美しいご降
誕の物語。イエス様ご自身、神から私たちへの最大の送りものです。そして、それを包む美しい
包装紙。それがこのルカの物語です。私たちが耳を傾けるべきことは、ルカを通して語ってくだ
30 さるイエス様のみ声です。イエス様と共にあること。これより大きな喜びはない。羊飼いたちの
喜びは、この贈り物が自分たちに宛てたものであつたということの故に、殊更大きなものになつ
たでありましょう。私たちも、クリスマスのできごとを通して、イエス様が私たちとともにいて
下さる、というこの大きな恵みを深く味わいたいと思います。